二代の情熱

広津柳浪と広津和郎

河井酔茗

詩の雑誌だから詩人の噂に限ると云うわけもなかろうから、今ちよいと思ひ出した作家の事を書く。

松川事件に対する広津和郎氏の熱意は皆の知つている通りだが、作家にしては変つた方面へ動きだしたものだと思う人もあるようだが、私には偶然でなく~~[illegible]~~肯（うなず）ずかれるところもある。

氏の厳父柳浪氏にも和郎氏の行動に通ずる血脈があつた。和郎は表面的、柳浪は潜在的の相違はあるが、親子として情熱のある性格は争へない。

私が初めて柳浪氏を訪問したのは明治三十年代であつた。早稲田に住んでいた頃で家の裏道を一丁ほど行くと茗荷畠のほとりに柳浪の寓居があつた。漠然と尋ねたのではない。